

# 授業実践報告 ― 出席一言カードの効用 ―

文学部人間科学科 篠崎 榮

はじめに

自分で「出席一言カード」と呼んでいる小さな紙片を多くの授業で使い出してからもう10年近くになる。この報告ではその小さな紙片が思いのほか大きな効用をもたらしてきたことを述べたい。昨今のFDばやりの大学改革のなかで、学生との距離を何とか埋めたいと考えておられる教員にとって参考になれば幸いである。

## 1. 出席一言カード作成のきっかけ

このカードの作成を思いついたのは、まだ教養部が存在していた時代であった。当時は現在より多人数の授業があって、学生が講義をどのように受け取り、どれほどの関心をもって聞いているのか、知りたくなったのである。もちろん、教壇から見える学生の授業中の態度や反応からだけでも、ある程度のことにはわかるが、直接的な学生の言葉によって自分の講義の受け取られ方を確認したかったのである。

折から大学改革で双方向的な授業ということが強調された時節でもあった。そう言われても、授業中の発言はいくら「なにか質問ありませんか」と促してもまず期待できない。教養の授業のように複数の学部が混じっているクラスでは、学生は授業中の発言にいつそう消極的になる。ともかく人前での発言にはしり込みするのである。そこで、学生の率直な思いを知るには、紙に書いてもらうのがいいと思ったのである。

はじめは余ったプリントの裏面を使って、B6判のサイズのものを作った。そのうち大量にあった余り紙も数年するうちに底をついたので、4、5年前から右にあるB7判サイズのを印刷屋に作らせて使っている。これは今年度から、FDのための小道具として文学部の教務企画係に常備してあり、使ってみたい教員が自由に使えるようになった。

## 出席一言カード

月・日	第	回	月	日
科目名				
学生番号				
氏名				

(アンケートは裏面に)

## 2. カードと評価

このカードを使うにあたって、当初私を悩ませていた問題について述べておきたい。それはこの出席一言カードを学期末の成績査定の一要素にするかしないか、するとしたらどの程度加味するのか、という問題である。

はじめの頃は、ボーナス点として5点満点で加味していた。「書いても書かなくてもいい」と言っているものの、毎回のように感想なり思いついたことを真面目に記入してくれる学生と、出席確認のために氏名だけは書くもののあとは白紙で提出することの多い学生とのあいだで、まったく差をつけたいとしたら、それは不公平だと考えたからである。

だが、そうすると、授業中から裏面までびっしりと書く数人の学生たちがでてきたのである。それが毎回のように続くと、この学生たちは「先生が読むのだからきちんとした内容のものを書かなければいけない」と半ば強迫的に考えて、授業中から教員の説明も上の空で書いているのではないか、と思うようになった。実際、そういう文章は読んでいてもそれほど面白くない。こちらが「思いついたことを書いてほしい」とだけ言っているのに、過剰適応なのである。教員に提出するものは背伸びしてでもきちんとした文章でなければいけない、という観念を大学入学時までにもたされた学生たちであろう。書くために授業を集中して聴いていないならば、本末転倒である。

そこで、いまでは学生には次のように告げている。「この出席一言カードにはその日の授業に関することなら何を書いてもいいし、書かないからといって成績が不利になることもありません。私が望んでいるのは授業に対する君たちの率直な感想なり疑問です。だから、このカードの記入のために取ってある授業の最後の数分間に、書きたいなと思うようなことが何も浮かばなかったら、無理して書かないように。ただし、チャイムが鳴るまでは授業時間なので、退室は認めません」と。

学生が過度に飾らず、「この先生には何を書いてもいいんだ」と思ってくれるかどうかは、最初の3回までの授業の雰囲気次第である。一般教育のコア科目では事前にシラバスが配付されていても、受講学生が確定するまでに3週ほどかかるという事情もある。もちろん、学生がこの教員には率直に書いても大丈夫だと思うからといって、必ずしも実際に授業への批判や異論を書くとは限らない。遠慮があるだろうし、それより教員の話聞いてすぐ批判することはとくに大学一年生では現実的には難しいことだろう。

筆者の経験では、受講学生に、①カッコいいことを書こうとするな、②メモ程度でいいから、思いついたことがあれば書いてほしい、ということが伝わると、ときに読み手である筆者にひらめきや新たなアイデアを与えてくれる言葉に出会うことがある。こうして、授業が単なる知識の伝達ではなく、双方向的な言葉による創造的な場になるのである。

## 3. 出席一言カードの日常の使い方

このカードの効用の一つは、ある程度以上の規模のクラスでは出席が確実に、時間をかけずにとれることである。カードを使つての代返、代筆は、きちんと注意しておけば、まず目につくことがない。今の学生はそこまでして仲間のためにリスクを冒すことをしないようである。あるいは、代返は公正ではないという倫理的意識が増大しているとも考えられる。

もし学生の遅刻をなるべく防ぎたいければ、授業の最初にこのカードを配ってしまうことである。その時に簡単なクイズの類をするのもいいだろう。筆者は授業のはじめに前週の一言カードを読み上げるが、学生たちは同じ授業を聞いた他の学生がどのような感想、考え、質問を思いついたのか、ということに

は強い関心があるらしく、遅刻する学生が少なくなった。次のように書いた学生がいる。「そして共に講義を受けている同世代の人の、私には思いつかない視点を知ることができ、「あの人と〇〇の件について対話したい」と思うようになった。それまで話していなかった人とも、授業内容について話すこともあった」。

このカードを使ううえで何よりも大事なことは、カードを読み放しにしないで翌週にフィードバックすることである。筆者は次のようにフィードバックをしている。

授業後、なるべく早くカード全部に目を通す。そうしないと往々にして目を通すのが次回の授業の直前ということになり、十分なフィードバックの準備時間がとれないからである。目を通すときに、次回の授業で取り上げてもいいと思うカードを選びだしておく。（それが多すぎる場合には、第二次選抜をする。）次に、選び出したカードを、授業冒頭に読み上げるもの、質問に答えるものに分ける。後者のカードの中には、授業以外の場で個人的に回答したほうが適切なものがある。それらについては、なるべく授業直後に教室で個別に対応している。もっと時間をとるような質問や相談の場合にはオフィス・アワーに研究室に来てもらう。

こうして次回の授業のはじめに質問への応答と、感想の読み上げ（ときに私のコメントを付して）など、一言カードへのフィードバックに、週によってちがうが15分ほど使う。たいていは、取り上げるカードのどれかへの応答がその週の授業への導入になるなど、意外とフィードバックとその日の授業が関連してくる。

このフィードバックの大切さは次の学生（2年次生）の言葉が示している。

「カードを提出させるだけでなく、質問にはきちんと答えがあるのがうれしかった。まだ浅い知識と経験のために、しばしば授業後の考え（＝感想）がかたよったものになったけれども、それを詳しく説明でもって正してくれるのがよかったと思う。（中略）この授業はカードを通じてのコミュニケーションのおかげで一人よがりにならずにすみ、またその結果私たち生徒も自分から意欲をもって授業に臨むことができた。是非来年以降も続けてほしい。良ければいくつかの質問と解答をピックアップしてまとめて下さったら、うれしいです。ファイルに閉じてオフィスアワーに見れたら良いと思う」。

要望度の高い意見だが、この一言カードを持続させるには無理をしないことである。授業の本体はあくまで教員が組み立てる講義内容であり、このカードはサービスの部類にはいることなので、本体がおろそかになるほどこのカードに時間を取られるのは本筋ではない。だから学生にも一言カードを書く時間としては授業の終わり数分しか与えていない。（その代わりに休み時間を使って書き続ける学生のために必ず待つようにしている。その時間は、学生が口頭で質問しやすい時間でもある。）なぜ数分しか与えないかというと、一つには沢山書かれるとその整理に多くのエネルギーを取られるからだし、短い時間のほうがひらめいたことを率直にかけると思うからである。

その点については、次のように一言カードの経験を書いている学生がいる。

「長く考えて練り上げた文章もそれなりに自分の考えを知る手がかりになるだろうが、短い時間で思うままにペンを走らせると、書いている途中で「そうだ、自分はこれが言いたかったのだ」と思いつくことが多々あった」。

また、フィードバックの方法として、何人かの学生の文章を抜粋してプリントにして配ることがある。そうしておく、読み上げる時間の節約になるし、あとで読み返すと授業の記録にもなる。また文字になっているので、こちらがコメントを述べるときにはクラスの全員が共有できるという利点もある。なお、プリントする場合、文章のあとに学部は記すが氏名は記していない。ただ、クラスの雰囲気によっ

ては、本人が書いた一言カードについて名指しで質問したり確認したりすることもある。それも学生と教員との距離が短くなれば、とってである。

#### 4. 出席一言カードの特殊な使い方

このカードは単にその日の授業の感想や質問のためだけでなく、他に様々な用途がある。アンケートやクイズのため、また無記名にして授業評価の回答用紙としても使える。筆者は多くの授業で授業評価の回答用紙として使っているが、なるべく学期の途中で行うことにしている。学部などで共通のフォーマットとする授業評価は最後の授業のときに行うのが普通だが、それだとその授業自体には改善のチャンスがない。学生としても、不満点を担当教員がどのように受け止め改善しようとしたのかが見届けられない。また、集計結果もなかなか知ることができない。

そこで、筆者は3年ほど前から、遅くとも最後の授業には学生に集計結果が伝えられるように、コースの途中で無記名での授業評価アンケートを実施している。そのときには一言カードをいつもの二倍用意する。質問は別紙（B6判）に印刷して、8つほどの質問にA、B、C、Dのいずれかで答えてもらう。それぞれの記号の意味は次の通りである。A：非常にそう思っている。B：そう思っている。C：そうは思っていない。D：とてもそうは思っていない。

質問の5つほどはどの授業でも共通のもので、3つほどが当該授業に特有のものである。共通な質問は以下のとおりである。

- ① この授業内容に興味・関心がもてた。
- ② これまでの講義期間を通して高い聴講意欲を持ってきた。
- ③ 教員の説明や話し方はわかりやすかった。
- ④ 講義中に質問したいことが浮かんた。
- ⑤ 配付された参考・推薦図書リストはこれから利用するつもりである。

特有な質問には、例えば、次のようなものがある。

- この授業が必修でよかったと今思っている。（専門基礎科目についての質問）
- 授業時間以外にも講義内容が思い出されることがある。
- この授業は自分の生き方を考えるうえで参考になる。
- この授業を後輩や友人に勧めたいと思う。

もう一つ、このカードを学生の意識調査的アンケートに使った例を紹介しておきたい。2002年度の前期には、日本中がサッカーのW杯に沸いたが（あるいはマスコミが沸かせたが）、学生の関心も高かったので、そこで私は一つのアンケートを思いついた。それは愛国心とか国家への帰属感についての学生の意識調査である。

1. W杯サッカーで日本が決勝リーグ初戦で敗れ、韓国が2回も勝ってベスト4に残っていることについて、
  - ① 韓国の活躍をうれしく思っている。
  - ② 日本が韓国より成績が悪かったことをくやしく思っている。
2. 国際サッカー連盟の国籍選択ルールについて、このルールは、代表する国を変える自由を選手から奪うものなので、改正されるべきだと思う。

これら三つの質問に対して、授業評価と同じくA～Dで回答してもらった。なお、2の間での国籍選

択ルールとは「ある選手がある国（N国）のナショナルチームの代表選手として選ばれたことがある場合には、その選手は以降、N国が消滅するなどの事態が起こらない限り、他の国家の代表選手としてプレーすることはできない」というルールである。したがって、今回決勝で敗れたドイツ代表選手のクローゼはポーランド国籍も有しているが、以降の国際試合でポーランドの代表選手としてプレーすることはできないことになる。

ちょうどある授業で、愛国心と郷土愛のちがいを話し、折しも有事法制法案が問題になっていた時期なので、このアンケートをとおして学生の国家意識および韓国への感情を知りたかったのである。アンケートの対象が100名ほどの数なので、確たることは言いにくいだが、2年次生のほうが1年次生より明らかに国家意識が弱まっていることが判明し、興味深かった。つまり、1①への回答ではAとBの回答が増え、1②の回答では逆に減り、2の回答ではAとBの回答の割合が増えていたのである。

## 5. 学生の声

最後に、今年度のコア授業の受講生がこの出席一言カードの経験について記した文章をいくつか紹介して、この報告を終わりたい。

「私が、中学・高校生活を通して、先生に対する授業のあり方や面白さ、改善点を言うことができたのはほんの数回である。それも、覚えているかぎりでは、どれも最後の授業で行われてきた。私たちの意見を聞いて、後の生徒に反映させようというつもりであろう。だが、最も反映してほしいと願う私たちには、反映されることはなかったのだ。

中学、高校とそんな思いをしていた私には、一言カードに逐一応えてくれる先生の存在は有難かった。少なくともそこには、私が確かに“参加”している授業が存在したからだ。

つまり、出席一言カードの教育的効果はこれである。自分が、確かに“参加”していることを実感できること。これによって、学ぶ側も、教える側も適度な緊張感の中にいられる。先生を『お！？』と関わらせてみたい。そんな感情も生まれる。それは、学ぶ意欲の増幅につながる。一言カードの効果とは、意欲の増加だと私は考えるのだ」（文学部生）。

「一言カードを書くことで、その日受けた授業の内容を振り返ることができるので、記憶に残りやすい。また、何を書こうかと考えながら授業を聞くので、先生の言葉に集中できる。一言カードに書かれた疑問や勘違いについて、次回に解説があるので前回に他の学生が何を考えていたかが分かる。それは一言カード集（抜粋したプリントのこと）も同じで、自分の意見と同じ人が載っていたり、全く違う発想で考えていたりする人を発見できて、様々な角度からの見方を教えてもらえた。学生と教官との唯一の接点で互いに学べるものだと思う」（法学部生）。

「この授業で用いている一言カードは、本当に素晴らしいものだと思う。それはなぜか。まず、教授と面と向かって自分の意見・感想を言わずとも、教授に伝えることができる。これは大きいのではないか。やはり、自分から研究室に向向いて教授と対話するのは、なかなか難しいと思う。時間が合わないときもあるし、さらに、一人一人意見をばらばらに伝えるのは、効率が悪い。また、教授の方としても、今、学生が自分の講義にどういう感想を持っているのか知るいい機会だと思う。次に、参加している学生がこの講義内容にどういう感想を持っているかを先生が知らせてくれるので、こちらとしても良い刺激になるし、考えさせられる。最後に、この一言カードを実施している教授は数少ない。その数をもっと増やしていければ、もっと、この一言カードが持っている力を発揮できるのではないかと思う」（工学部生）。

「このカードによって、毎回の授業で感じたこと、思ったことを先生に対して伝えることができた。

(中略)しかし、何より一方通行の授業を避けられたことが一番の効果ではないだろうか。今までは一方通行だったが、大学ではそうではなく意志や思いを伝えることができる、と感ずることができ、大学は「共育」の場であると感じることができた。そして、もし一言カードがなくても、自分から思いを伝えたり、質問することが重要だと思った。そのような点で、消極的部分も解消できる効果があったと思う」(工学部生)。

「一番良かったと思う点は授業で疑問に思ったことを書いておくと次の授業で先生からその質問に対する「応え」が返ってくる点です。これによって、理解できていなかった人も理解でき、そこから一歩進んだ疑問や考えを抱くことができ、理解していた人もより深く理解が進んだと思います。(中略)「打てば響く」という喩えが正しいかどうかは分からないけど一言カードという一枚の紙切れは確かに自分(たち)にとっても、先生にとっても大変有意義な存在でした。このようなタイプのものが大学やその他の教育の場において多く広がってほしいと思います。そうしたらきっと対話のできる人たちが育つ有益な下地が作られると思っています」(薬学部生)。

以上述べてきた出席一言カードを使つての授業が、自分の当初の予想よりうまくいった時には、最後の授業でこちらからのお返しの一言を学生に与えたいことがある。

「この学期中、出席一言カードを通して、君たちがくれた沢山の、そして率直なことばに感謝している。どうもありがとう。おかげで、学期中、このクラスを教えることに後ろ向きになったことは一度もなかった。やはり教育は「共育」かな。

プリントだけでなく一言カードの抜粋集もふとした時に読み返して、私の情熱と共に、その時の息吹からたまたま私を通して語られたことばを思い返してくれれば、幸いです」。